様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2010～2014
課題番号：２２３２００１７

研究課題名（和文）共生の宗教へむけて――政教分離の諸相とイスラーム的視点をめぐる地域文化研究

研究課題名（英文）Religions and Living Together : Laicity, Secularization, and the the Islamic Perspective

研究代表者
増田　一夫（Masuda, Kazuo）

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：７０２０９４３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　14,500,000円

研究成果の概要（和文）：「宗教的近代」を疑問に付す諸現象（宗教の再活性化、保守革命、イスラーム民衆運動）に対して西洋諸社会が警戒を示すなかで、寛容を創出すべき政教分離の制度が、かえってマイノリティ抑圧へと転化する状況が見られる。本研究では、民主主義的諸価値が特定の宗教に対して動員され、グローバル化に伴う社会問題を相対化、隠蔽する様子を分析した。フランスでは、国家が対話しやすいイスラーム教を制度化するという、政教分離に矛盾する動きも見られた。他方で、ナショナル・アイデンティティとしてのライシテ（脱宗教）が、イスラーム系市民を周縁化しつつ、差別、経済格差、植民地主義的な人種主義をめぐる問題提起をむずかしくしている。

研究成果の概要（英文）：In their distrust towards the phenomena questioning the "religious modernity" (reactivation of the religions, the conservative revolutions, the Islamic popular movements), the western societies advocate the respect for the democratic values which, sometimes, turn against religious minorities. Our research tried to analyze how these values were mobilized against certain religious minorities and served to cover, otherwise to hide the social questions caused by the globalization. In France, we can observe an attempt of the State organizing a “French Islam”, a gesture hardly compatible with the notion of “laicity”. But laicity was the very value brandished as representing the national identity, marginalizing Muslim minority and making it more difficult to approach as social issues the questions of discrimination, disparities and racism inherited from the colonial past.

研究分野：哲学

キーワード：宗教　政教分離　ライシテ　フランス　エジプト　宗教間対話　移民

１．研究開始当初の背景

「宗教的近代」という概念は、MaxWeber が提示した世界の「脱呪術化」もしくは世俗化が進行するプロセスとして捉えられていた。1970 年代までは支配的だった観点である。しかし、イラン革命（1979 年）はその見方に大きな疑問を突きつけた。また、近代化を達成した欧米社会においても新たな宗教現象が生まれるなど、宗教の再活性化が観察された。アメリカにおける「保守革命」もその一つである。1980 年代から、「宗教の回帰」や「神の復讐」が語られはじめる。それらの言説は、形を変えつつも、宗教的対立によって分断されたグローバルな地政学として、ハンティントンの「文明の衝突」論（1996 年）によって描かれてゆく。その「理論」は、幾多の批判を受けながらも、少なからぬ影響力を持った。また、世界貿易機関の成立（1995 年）ともに本格化し、資本主義の新たな段階をなすグローバル化が、「宗教」が前景化される時点と重なっている点も忘れてはならない。

冷戦構造の終焉が旧社会主義圏に残したものも、民族や宗教の対立であった。旧ソ連圏や旧ユーゴスラビアでの出来事がそれを物語っている。他方で、脱植民地化から 30 年を経て、多民族化・多文化化が進行した欧米の社会では次のような推移があった。社会主義的イデオロギーの衰退とともに、社会を構成する諸集団や社会問題を語る差異には、階級や境遇の語彙は採用されず、「アイデンティティ」が語られるようになった。マジョリティのナショナル・アイデンティティに、とりわけ宗教によって規定されたマイノリティが対置されるようになった。そのなかで、ヨーロッパの「イスラーム」は、そのなかで共生を困難にする最大の「問題」として扱われるようになった。

以上が、研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

「共生の宗教へむけて――政教分離の諸相とイスラーム的視点をめぐる地域文化研究」と題された本研究は、21 世紀が抱える重要問題として宗教を取り上げる。宗教と寛容の問題についてはすでに数多くの議論があるが、とりわけ「文明の衝突」論以来、イスラームと西洋的政教分離および民主主義との困難な両立が大きな問題とされてきた。本研究は、イスラームをめぐる欧米の言説を一つの出発点とする。しかし、対立の責任がもっぱらイスラーム側にあるとする視点を無条件で受け入れることはしない。むしろ、1)「共生の原理」として掲げられた政教分離がイスラーム系市民もしくは移民をかかえる欧米社会で「共生の阻害要因」として働きうること、2)欧米諸国における政教分離のあり方にも（米‐仏に特徴的に現れているように）多くの違いがあること、3)イスラームも単一ではなく、随所でさまざまな運動が見られ、近代社会へ自らを開こうとする幾多の努力を重ねていること、に焦点を当てる。本研究の目的は、一言でいうならば、単に「共生の宗教」のあり方のみではなく、同時に「共生の政教分離」のあるべき姿を追求することである。

３．研究の方法

基本的にヨーロッパ‐イスラームの軸を中心に据え、補足的に他地域の情報・資料の収集・分析をし、理論化を試みる。具体的には、以下の4つの方向で研究を展開した。

（１）海外の研究者を招いた形も含めて、共同研究会を開き、メンバー間で事例を共有した。

（２）各対象地域に関する資料、広域イスラーム移民に関する資料を中心に、政治、社会、思想、歴史などに区分し、国内外からの計画的な収集を行った。

（３）対象地域にメンバーを派遣して、現地調査および現地研究者との情報交換を行った。

（４）現代社会を扱う研究なので、昨今の欧米での動きはもちろんのこと、北アフリカ、中東での動きも重視し、出来事に応じて柔軟に方向を修正しながら研究を進めた。

４．研究成果

(1)　平成22年度4月には、フランスにおける政教分離の大家J. Baubérot教授（高等研究実

習院）を囲んで現状の報告を受けるとともに、脱宗教化（laïcité）と世俗化（sécularisation）の相違と、両概念を区別する方法論的メリットを確認した。7月には、A. Zambarbieri教授（パドヴァ大学）と意見交換を行い、9月には研究代表者をフランスに派遣、資料調査を行うと同時に宗教（とりわけイスラーム）をめぐる状況調査に従事させた。長沢は、チュニジアとの交流セミナール、地中海研究グループ（トリエステ大学）、イスラーム地域研究国際研究会などで、伊達は国際宗教学会、日仏社会学会などで研究成果を発表し、内外の研究者との交流に努めた。

本研究の重点は現代社会にある。研究開始早々、二つの顕著な動きが観察された。フランスにおけるブルカ着用禁止の動き、そしてチュニジアから始まったアラブ世界の民主化の動きである。後者は画期的な事件であり広範な影響を残すことが予想された。長沢は、とりわけ民主化の動きのなかで世俗化がどのような形で現れるかに注目した。伊達の労作『ライシテ、道徳、宗教学』（勁草書房）が11月に刊行された。フランスの政教分離に関する重要な著作である。

(2)　平成23年度は東日本大震災と福島第一原発事故の余波が残り、国際学会なども多くがキャンセルされた。そのなかで、R. Girardに強く影響を受け、原子力災害にも詳しいJ.-P. Dupuy 氏（スタンフォード大学教授、フランス放射線防護原子力安全研究所）の来日を実現させ、研究会を開催した。大規模災害と巨大科学技術における宗教性という新たな次元を開拓する手掛かりを得ることができた。M. Milot 教授（ケベック大学モントリオール校）との研究会、J. Host 監督のドキュメンタリー『スカーフ論争――隠れたレイシズム』(2004 年）を上映し、フランス植民地史専門の平野千果子氏（武蔵大学）などと意見交換も行った。

代表者は、上記の組織を指揮すると同時に、中間的なまとめとして、「ナショナル・アイデンティティとしてのライシテ――フランス、スカーフ問題の背景」を執筆した。伊達はカナダ・ケベック州におけるライシテにも対象を広げ、活発な活動を展開した。平成22年度まで分担研究者であった7名は連携研究者となったが、著書2点、一般学術論文7点を著している。とりわけ長沢は民衆革命とイスラームとの関係を考察し、アラブ革命関連の論文3点を執筆した。

(3)　平成24年度の研究は、主に1)フランスのライシテをめぐるさらなる考察ならびにカナダ・ケベック州のライシテとの比較、2)フランスの宗教事象学際研究センター（CEIFR）との関係強化、3) 1970年代以降のフランス社会の推移の確認、4) 「アラブの春」のその後に充てられた。

1)伊達はライシテをめぐる3つのアプローチ（M. Gauchet、J. Baubérot、R. Rémond）を扱った論考をはじめ、5件の成果を発表した。代表者は、12月に、「ブシャール=テイラー報告」の一方の執筆者であるG. Bouchard氏（ケベック大学シクチミ校教授）を迎えての研究会を開催した。2)代表者は11月にパリに赴き、情報交換ならびにCEIFR編纂の『宗教事象事典』を各言語へと翻訳する際の諸問題について、発表、討論を行った。3)9月にパリ第7大学教授E. Tassin氏を迎え、「新たなコスモポリタニズム概念」について考察、12月にはフランス国立科学センターのJ.-P. Le Goff氏と「1968年5月」以降フランス社会に起きた変化について意見交換を行った。4)長沢は『アラブ革命の遺産』（平凡社、606頁）でアラブ社会を貫く思潮の数々について論じ、本研究の一方の焦点であるイスラーム圏について明瞭な思想地図を提供した。網野は、初期ペルーにおける宗教・政治コンフリクトを論じた論考を発表し、ペルーにおける聖母信仰をめぐる報告も行っている。

(4) 平成25年度は、引き続きヨーロッパ（西洋）‐イスラーム間の緊張を中心に研究を続けた。緊張もしくは対立は必ずしも国際的な次元で見られるものではなく、ヨーロッパ諸国においてはホスト社会と移民との間の緊張や摩擦として現れる。イスラーム（アラブ）諸国でも地域の政情不安に伴って、国際的な武装組織による内戦状況、一国内での宗教対立および衝突が起こっている。課題の性質上、現時点でも進行しつつある多様な状況を踏まえることに配慮した。代表者はイスラーム嫌悪が生まれる土壌について、フランスの例から考察した。伊達は国家が自分の対話者となるべきイスラーム側の組織を構築しよう

とした点に注目し、その経緯を分析した。全体として、フランス特有のライシテ（脱宗教性）概念の重要性をあらためて確認するなど、所定の目的を達成したと自負している。

海外研究者との交流の一環として、S. Fleury 氏（パリ・アメリカ大学）、J. Letourneau 氏（カナダ、ラヴァル大学）と研究会を行った。科研費の繰越を許されて平成 26 年度も研究のまとめ続けたが、パリの CEIFR および EPHE といっそう緊密な協力関係を結び、前者とは『宗教事象事典』（フランス大学出版会刊、2010 年。2016 年に改訂版を刊行予定）をめぐって今後も共同作業を行うことになった。フランスにおけるイスラームの対応については、フェミニズムの視点から C. Delphy 氏（フランス国立科学研究センター）、人種主義の視点から E. Fassin 氏（パリ第 8 大学）の協力が貴重であった。

連携研究者では、とりわけ長沢がエジプト情勢に関する著書、論文を精力的に執筆した。杉田英明はイスラーム信仰全般について、安岡治子は東方教父に関する研究を発表している。

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要の枠で『ODYSSEUS 別冊 2』を作り、研究成果の一部を収録した。大学のリポジトリーからも閲覧可能である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　20　件）

① 増田 一夫、戦いライシテ――『シャルリー・エブド』のフランス、ODYSSEUS（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要）、査読無、別冊 2、2015、141-152

② 増田 一夫、デリダ初めに――存在論的差異と存在者的隠喩、現代思想、査読無、vol。43-1、2015、101-115

③ 伊達 聖伸、フランスにおけるイスラームの制度化と表象の限界――宗教を管理するライシテの論理、ODYSSEUS（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要）、査読無、別冊 2、2015、35-57

④ DATE、 Kiyonobu、 La laïcité：de curieux chassés-croisés entre la France et le Japon?, Revue de Collaboration franco-japonaise, 査読無, vol.84, 2015, 238-241

⑤ 長沢 栄治、アズハルと 2011 年エジプト革命、ODYSSEUS（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要）、査読無、別冊 2、2015、59-84

⑥増田 一夫、「哲学的人間学」と生存の政治学、ODYSSEUS（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要）、査読無、第 18 巻、2014、131-158

⑦ DATE, Kiyonobu, La laïcité de reconnaissance s'enracine-t-elle au Japon?, Diversité urbaine, 査読有, vol. 13-1, 2013, 65-84

⑧ 杉田 英明、「マホメット喚山」説話の唐山伝搬、ODYSSEUS（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要）、査読無、第 17 巻、2013、1-18

⑨増田　一夫、ナショナル・アイデンティティとしてのライシテ――フランス、スカーフ問題の背景、ODYSSEUS（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要）、査読無、第 16 巻、2012、59-83

⑩ 伊達 聖伸、ライシテへの 3 つのアプローチ――マルセル・ゴーシェ、ジャン・ボベロ、ルネ・レモンの著作にみる研究動向の一断面、宗教法、査読無、第 31 号、2012、79-99

⑫ 伊達 聖伸、ライシテの変貌――左派の原理から右派の原理へ？、ソフィア、査読無、第 60 巻 2 号、2012 年、106-122

⑬ 伊達 聖伸、宗教を伝達する学校――ケベックのライシテと道徳・倫理・文化・スピリチュアリティ、宗教研究、査読有、第 365 巻、2011、243-268

⑭　伊達 聖伸、2つのライシテ――スタジ委員会報告書とブシャール=テイラー委員会報告書を読む、宗教法、査読無、第29号、2010、117-141

〔学会発表〕（計 16件）

①　増田 一夫、初めに――差異、寓話、そして前未来、ジャック・デリダ没後 10 年シンポジウム（招待講演）、2014年11月22日、早稲田大学（東京都新宿区）

②　長沢 栄治、近代エジプトにおける革命の系譜――2011年革命への道、第30回日本中東学会講演会、2014年11月19日、東京大学（東京都文京区）

③　増田 一夫、生き延びることの政治学――ルソーを読むアーレント、中央大学人文科学研究会（招待講演）、2013年10月15日、中央大学（東京都八王子市）

④　伊達 聖伸、政教分離の歴史的意義、国際日本文化研究センター・シンポジウム「宗教と公共性――神道と宗教復興から」、2013年7月22日、国際日本文化センター（京都市西京区）

⑤　DATE、Kiyonobu、De la laïcité de séparation à la laïcité de reconnaissance、Colloque international 《Laïcité : Reconfigurations et nouveaux défis (Afrique、Amérique、Europe、Japon、Pays arabes)》、2013年4月11日、CNRS Site Pouchet(フランス、パリ)

⑥　MASUDA、Kazuo、Traduire au Japon、CEIFR、Atelier de traduction、2012年11月28日、CEIFR（フランス、パリ）

⑦　MASUDA、Kazuo、Point de vue sur la situation française、Bilan Sciences humaines。L'intellectuel en question、2011年11月10日、日仏会館（東京都渋谷区）

⑨　DATE、Kiyonobu、Watsuji Tetsuro et son approche culturelle des religions、Université francophone d'Asie、2010年10月1日、日仏会館（東京都渋谷区）

⑩　伊達 聖伸、ライシテ研究の現在：ジャン・ボベロ、マルセル・ゴーシェ、ルネ・レモンの著作の翻訳を通して、日仏会館若手研究者セミナー、2010年7月3日、日仏会館（東京都渋谷区）

⑪　長沢 栄治、ヨーロッパ人が聴いた礼拝の呼びかけ――ウィトロー・レイン・ハーン、ナポレオン『エジプト誌』と近代文明、2010年5月8日、中央大学（東京都八王子市）

〔図書〕（計3 件）

①　永見文雄、三浦信孝、川出良枝、伊達聖伸、風行社、ルソーと近代――ルソーの回帰・ルソーへの回帰、2014、142 (127-141)

②　Jean Baubérot、Micheline Milot、Philippe Portier、Kiyonobu Date、Éditions de la Maison des sciences de l'homme、Laïcité、laïcités : Reconfigurations et nouveaux défis、2014、397 (169-188)

③　長沢 栄治、平凡社、エジプトの自画像ナイル思想と地域研究、2013、349頁

６.研究組織

(1)研究代表者

増田 一夫（MASUDA Kazuo）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：70209435

(2)研究分担者

①伊達 聖伸（DATE Kiyonobu）
上智大学・外国語学部・准教授
研究者番号： 90550004

②網野 徹哉（AMINO Tetsuya）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
（平成24年4月より教授）

研究者番号：60212578
（平成 23 年度より連携研究者）

③杉田 英明（SUGITA Hideaki）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：90179143
（平成 23 年度より連携研究者）

④長沢 栄治（NAGASAWA Eiji）
東京大学・東洋文化研究所・教授
研究者番号：00272493
（平成 23 年度より連携研究者）

⑤村松 真理子（MURAMATSU Mariko）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
（平成 27 年 4 月より教授）
研究者番号：80262062
（平成 23 年度より連携研究者）

⑥矢口 祐人（YAGUCHI Yujin）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
（平成 25 年 12 月より教授）
研究者番号：00271700
（平成 23 年度より連携研究者）

⑦安岡 治子（YASUOKA Haruko）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：90210244
（平成 23 年度より連携研究者）

⑧古矢 旬（FURUYA Jun）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
（平成 24 年 4 月より北海学園北海商科大学・教授）
研究者番号：90091488
（平成 23 年度より連携研究者、平成 24 年からメンバーから外れる）